

日本の民家と屋根、そして

建主の思いや職人たちの技術を現代に継承



③吹田の民家。150年前に岐阜地方から移築し大和棟に姿を変えた民家を再生

録されていきました。柱や天井板なども一カ所ではなく吉野や多武峰、宇陀、大阪、堺など遠い数カ所の材木を扱っている所から購入してました。屋根瓦は、使われる場所ごとにさまざまな種類の瓦を一つ一つ指定してました。それぞれの項目には数量と値段が記入され、少し離れた七条村からも瓦は購入されてました。

トラックや貨物車のない時代のことですから、牛車や大八車などで遠い

ところから運び込んだのでしょう。また、いつから大工始めをし、石築き、棟上げをいつしたかなど、大雑把な工程が書かれてありました。

手廻り(手伝)、木挽き、大工、瓦屋、左官などにかかった人工と費用、材を買い集めるための旅費なども細かく書き記してありました。

このように書かれた台帳からは、施主の相当なる思いや材木店や材料屋、大工や職人達の意気込みが感じられるのです

が、残念なことに現在はもう普請帳に書かれたその町家は存在していません。

ところで、奈良町家に關して、少なくとも昭和の中期頃までの人々の意識はどのようだったのでしょうか。農家は、先祖の建てた家に代々住み続けていました。一方、町家においては、家業の盛衰に伴い家を手放すことや、また手狭になったからと少し大きな家に移り住んでいくというようなことは日常的にあったよ

伝統建築を在来構法で 建物の魅力最大限に活かす

あつたように思います。設計事務所を設立。こうして、奈良で独立し、初期の仕事の一つに東大阪の民家(写真②)がありました。150年を経た元紺屋の主人から現代の住まいに改修を

うです。とは言い町人たちも、建替えることの大変さを知っていて、なおかつ物を大切にし、朽ち果てるまで使い続けるということとは当たり前のこととして考えられていた時代です。

たいという話でした。実は施工会社や設計者など何人もの人々にその主屋の建物を相談したのでしたが、10人に聞けば10人も古いので解体して新しい建物に建て替えた方が良いと言われ思い悩んでいるとのことでした。

当時は再生という言葉もあまり知られていない頃でしたので、仕方のないことかもしれない。見れば十分再生に耐えうるしっかりとした造りで、民家としてもとても魅力的なものでした。



④旧新川家住宅。泉佐野ふるさと町屋館として活用、この地方特有の本瓦の綴(しころ)葺き屋根。修復再生

切妻で平入り棧瓦葺き、厨子(小屋裏に設けた物置)2階建ての民家を在来構法に変え、壁は竹小舞を挿いで土壁とし、屋根は野地板の上に杉皮を張り、その上に土をのせ、新規の瓦で葺きました。この現場が、30年ほど前の民家再生の始まりとなりました。

その後も伝統的建物の再生工事は、布基礎やベタ基礎で土台を敷設し、筋交いや構造用合板を使用する在来構法を用いました。

1995年に発生した兵庫東南部地震の数年前に大阪府吹田で仕事をしました。150年前に岐阜地方から移築し、大和棟に姿を変えたという民家(写真③)でした。幸い地震で少々の影響は出たものの、本体に傷みはありませんでした。屋根とも必要なので、80年後、100年後のために④の保存修理に関わりました。その建物は江戸時代に海運で栄えた佐野町場・湊浦にあり、豪商・食野家などを輩出したところでもあります。

新川家が醤油業を営むために移り住んだ、天明年間より遡る建物ではないかと考えられています。この町場は自然的に道ができていたために地割りが変形しており、その敷地境界線状に建物が建てられています。

■文化財保存修理と瓦
以前、泉佐野市指定文

(つづく)